

第7回群馬地域リハ研究会のお知らせ

第7回群馬地域リハビリテーション研究会を、平成21年1月24日(土)、群馬会館ホールにて開催します。詳細は群馬県地域リハビリテーション支援センターホームページか、関連団体事務局宛のチラシでご確認下さい。事前申し込み受付は平成20年12月17日(水)開始の予定です。駐車場利用確認のため事前申し込みをしてください。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。 県地域リハ支援センター研修部副責任者 勝山しおり

【日時】平成21年1月24日(土) 13:30 ~ 17:30

【報告】13:40 ~ 14:00 群馬県の地域リハ関連情報(予定)

【講演】14:00 ~ 15:30

脳のリハビリテーション - 生活行為へアプローチする認知運動療法の紹介 -

講師:高知医療学院 学生部長 宮本省三 先生

イタリアの神経科医により提唱された、「脳のなかの身体」を治療する認知運動療法の考え方、視点を解説していただく。「手足を動かす」リハビリを超えて、生活の「行為」を変化させるリハビリの必要性と、それを活用した暮らしの質を高めるためのリハビリのあり方をご提言いただく。目からウロコの講演です。

【講演】15:45 ~ 17:15

運動機能向上・転倒予防事業を通じた地域づくり - 長崎県の地域リハビリテーション活動から -

講師:長崎大学医学部保健学科 学科長 松坂誠應 先生

長崎市の在宅介護支援センターと協力して開始した転倒予防教室を、地域リハ支援体制を活用して全県的に広げ、現在は高齢者健康指導ボランティアを育成し、転倒予防教室での活用や自主運動グループへの移行を行っている。住民ボランティアの参加によって虚弱高齢者の体力・意欲も向上しているとのこと。この間行ってきた運動プログラムの効果や関係機関の連携の仕方を紹介していただき、介護予防や地域リハのあるべき方向性について講演していただく。

住環境整備効果の検証に取り組んでいます

富沢病院 亀井 実

私たちは、平成19年度健康づくり助成「あさを賞」の支援を受けて、高齢在宅障害者の住環境整備に関する調査研究に取り組んでいます。

研究班には、当院の富澤医師、群馬大学保健学科の浅川理学療法士、前橋市の北原理学療法士と荒木作業療法士、前橋協立病院の渡辺理学療法士と、パナケア真中株式会社の滝村建築士が参加し、平成20年5月に研究活動を始動しました。

脳血管障害や骨折などによって障害者となった高齢者にとって、住環境は地域生活の再構築に大きな影響を与えます。しかしながら、改修部分の使い勝手や満足度などの検証、また生活活動範囲を拡大させ

るための住宅改修についての検証は十分に進んでいないのが現状です。本調査研究の目的は、退院前後で住環境整備を行った高齢在宅障害者宅を訪問し、その後の使用実態と生活への影響について明らかにすることです。最終的には有益な住宅改修のポイントをまとめ事例集を作成したいと思っています。

現在、30症例を目標に訪問調査を実施しております。10月中には訪問調査を終え、年内には情報の分析と事例集作成を進め、学術大会などでその成果を積極的に公表したいと考えています。実践で役立つ成果を出せるよう頑張りたいと思います。

介護予防サポーター養成研修の動向について

群馬県健康福祉部介護高齢課企画係 武井 寿

群馬県では、介護予防事業の推進を図るため、地域で自主的に介護予防活動に取り組むリーダーや市町村等の介護予防事業に参加するボランティアの養成を目的として、平成18年度から介護予防サポーター養成研修に取り組んできています。養成研修の実施にあたりましては、関係団体等の協力をいただき、これまでに2,114名の介護予防サポーターが養成されました。この場をかりて、お礼申し上げます。

介護予防サポーター養成研修実施状況

| 区分 | 18年度 | 19年度 | 計 |
|----|------------|------------|------------|
| 初級 | 19回 2,093人 | 22回 1,184人 | 41回 3,277人 |
| 中級 | 26回 1,172人 | 24回 942人 | 50回 2,114人 |

中級研修終了者 = 介護予防サポーター認定数 2,114人

介護予防サポーターが、地域で積極的な活動を行うことが期待されているところから、平成20年度からは、それぞれの市町村で介護予防サポーターの養成に取り組むことを県として推進しています。

本年度の介護予防サポーター養成研修実施予定は、初級研修を16市町で20回、中級研修を15市町17回実施が予定されています。また、3市・村では初級研修及び中級研修を実施する方向で検討をしており、多くの市町村で、介護予防サポーターの養成に取り組むこととしています。県といたしましても、各市町村における介護予防サポーター養成研修の円滑な実施と、介護予防サポーターの質の確保を図るため、平成20年7月31日付で「介護予防サポーター養成研修実施要領」を制定するとともに、研修の取り組みにあたっては、県内12箇所にある地域リハビリテーションセンターがそれぞれの市町村と連携し、支援していくことになっています。

また、介護予防サポーター育成調査報告書では、「介護予防サポーターが地域で活動できる場所がない」などの課題が浮き彫りにされているところから、介護予防サポーターのみなさんが地域で活動及び活躍できるよう、各市町村における取組事例の紹介等を通して、支援していきたいと考えています。

平成20年度介護予防サポーター養成研修実施予定

| 区分 | 実施市町村数 | 実施回数 |
|----|--------|------|
| 初級 | 16市町 | 20回 |
| 中級 | 15市町 | 17回 |

実施市町村数、実施回数には、地域リハビリテーション広域支援センターと共催も含む。

複数市町村による共催の場合、実施市町村数は、共催した市町村数とした。

地域リハビリテーションネットワークに期待する ～ 障害者自立支援法の現場から ～

社会福祉法人 恵の園 障害者支援施設 めぐみの里 施設長 賤津進介

私が障害者福祉に関わり始めた昭和40年代は、ノーマライゼーション以前の思想であり、障害者は施設で生活するほうがふさわしいという一般的見方がありました。また誤解や偏見なども一部にあり、町の中に施設を設置しようとする反対されるなど、障害者は社会の片隅に追いやられる不幸な状況がありました。障害者関係の福祉法は戦後相次いで作られましたが、まだ国力が回復していない時代ですから、重度障害者の対応まで及ばず、働ける可能性が高い障害者のリハビリが優先されていたのです。やがて右肩上がりの成長が止まり低成長時代を経て今日では世界不況の時代に入っています。平成18年4月に施行された

障害者自立支援法は、字句の通り“障害を持つ方々が地域の中で働き、活動し、暮らせるよう支援する”ことを目的としています。(注:障害者自立支援法は身体障害・知的障害・精神障害を統合した「障害」としてしています。)

いま全国の障害者施設が、利用者の方々をもう一度地域生活に戻す方針のもとに色々と方策を考えているところです。しかし施設を出ても暮らす地域に受け皿が無ければ自立生活はできません。受け皿には、住む場所、就労・作業の機会、日中活動或いは機能訓練等の機会、日常的には身体介護や支援(食事や金銭管理や外出など)、健康管理、防犯・防災対策、

相談等多岐にわたっており、これらを行政担当者、支援ワーカー、ヘルパーや福祉サービス事業者、理学療法士・作業療法士、言語治療士、訪問看護師、地域自治会、警察、消防署、病院等との協力体制による重層的な幅広い“支える地域ネットワーク”が必要です。リハビリは障害者の復権を支援する活動であり、福祉・医療・介護それぞれの分野でますます必要とされています。にもかかわらず地域リハビリはまだ試行錯誤の段階です。本格的な高齢社会に入りましたから地域支援ネットワークのシステム構築は緊急の重要課題です。

このように文章で書きますと、障害者支援はとても大変な印象で受け止められてしまうかもしれません。しかし障害を持っていない人でも、社会生活というのは大なり小なり色々な支援ネットワークで成り立っています。高齢者の場合ほとんどの方が何らかの障害をお持ちです。障害者・高齢者が不自由なく生活できる社

会は健康な人にとっても不自由はないはずで、当法人もグループホーム、ケアホームを市内に設置し9名の知的障害者が地域生活を送っています。日中は施設に通い作業に従事しています。このうち5名の方は法人がパート職員として雇用契約を交わしています。労働能力は低く仕事上でも支援が必要ですが、障害者雇用は社会福祉法人も率先すべきことと考え実践しています。施設とホームではどちらがいいか聞くと皆異口同音に“ホームがいい”という返答が返ってきます。施設での暮らしは集団生活ですから、少々大変でも自由さが違う静かなホームの生活を望まれるのは当然です。

障害を持つ方や高齢者の方々の支援活動には多分野の方々がかわるので、地域内での交流が活発になり、結果として人間関係の潤いが戻り、地域の安全性が向上するなど地域そのもののリハビリ効果(活性化)が期待されるのではないのでしょうか。



共同募金運動 60周年記念特別配分金事業「安心安全なまちづくり」
「高次脳機能障害の啓発と理解のシンポジウム」
「高次脳機能障害はじめての一步」
～ 当事者の思いと家族の願いをみんなで支えよう ～

日時 平成 20 年 11 月 29 日(土)
開場(受付開始) 12:00
開演 13:00～、シンポジウム 15:00～
会場 群馬県社会福祉総合センター大ホール
前橋市新前橋 13-2
TEL : 027-255-6000
定員 300 名
参加費 無料

私達は、事故や病気で脳に損傷を受け、高次脳機能障害を負った当事者・家族・支援者の会です。この障害は近年の救急医療の進歩と共に増加しています。命は助かったものの、今までと変わってしまった当事者に戸惑い、どう対応したらいいのか分からない家族や周囲、また自分の障害を理解出来ない当事者達。群馬県では、まだまだこの障害の認知度は低く支援も遅れています。誰にでも起こり得る障害です。たくさんの方にこの障害を理解して頂きたいと思えます。

今回は初めて当事者・家族達が自分たちの経験や思いなどを発表します。当事者・家族の置かれている状況に耳を傾けてください。また、「すてっぷなな」とは、神奈川県にある高次脳機能障害者に特化した作業所です。(ノーサイド理事長 立上 葉子)

プログラム

- 13:30 講演「誰でもわかる高次脳機能障害」
宮永 和夫 氏(南魚沼市立ゆきぐに大和病院院長)
- 14:00 講演「高次脳機能障害はじめての一步」
野々垣 睦美 氏(クラブハウスすてっぷなな所長)
- 14:50 休憩(10分)
- 15:00 シンポジウム
<コーディネーター> 宮永 和夫 氏
<シンポジスト>
生方 克之 氏
(神奈川リハビリテーション病院医療福祉相談室長)
手島 雅敏 氏
(南魚沼市立ゆきぐに大和病院 リハビリ科長)
野々垣 睦美 氏
当事者・家族 3 名

申し込み・お問い合わせ
群馬県こころの健康センター 相談援助係
〒379-2166 群馬県前橋市野中町 368
： 027-263-1166 FAX : 027-261-9912
定員を超えた場合に限り、お断りの連絡を致します。

「イキイキとした地域生活」を評価する

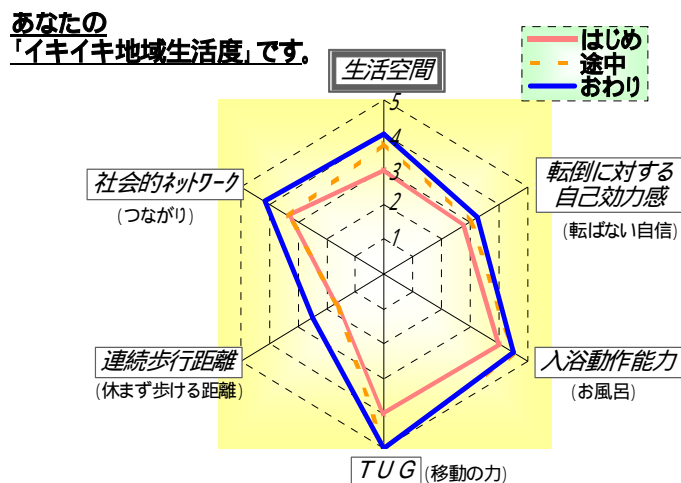
- 介護予防のための評価セット E-SAS の紹介 -

群馬大学 浅川康吉

E-SAS (イーサス) は Elderly Status Assessment Set の略で、「地域生活」を目に見える形で表現する評価セットです。介護予防事業で重視されている「活発な生活」とか、「イキイキとした暮らし」は、理念としてはわかりやすいのですが、その状態を具体的に示すことは意外に難しいものでした。

E-SAS は日本理学療法士協会が平成 17 年度から 19 年度にわたり厚生労働省の「老人保健事業推進等補助金事業」の交付を受けて開発しました。生活空間、転倒に対する自己効力感、入浴動作能力、移動の力、連続歩行距離、社会的ネットワークの 6 つのデータをつかって「イキイキとした地域生活」を介護度別標準値を参照した六角形で表現します(右図)。

この評価セットは日本理学療法士協会のホームページにて無料公開されています。所定の評価用紙を用いてこれら 6 つのデータを入力すると、自動的に六角形を描出してくれる優れものです。介護予防事業の参加者には、これまで以上に動けるようになったとか、友人とのつながりが増えたとか、外に出るようになったとか、いろいろな変化が生まれると思います。E-SAS を使えばこうした変化を包括的、客観的にとらえることができると思います。



E-SAS ホームページ

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jpta/e-sas1.html>

第 14 回 World Congress of Psychophysiology (ロシア) に参加して

群馬大学 酒井 保治郎

9 月 7 日から 14 日まで、ロシアのサンクトペテルブルグで開催された第 14 回 World Congress of Psychophysiology に出かけたので、簡単に学会の内容 + について報告します。

何度か国際学会には出かけたが、ビザが必要な国での学会は初めてであり、発表がアクセプトされてすぐに、準備に取りかかった。学会本部に宿泊ホテルを予約し、ビザ申請に必要な書類を送ってもらうことにしたが、その手続きに入出国する航空便の時刻が必要であった。ところが、あいにく予定していたヘルシンキ経由のフィンランド航空便が 6 月初めの申し込みで、すでに往路の成田 ヘルシンキ、ヘルシンキ サンクトペテルブルグともに満席であった。キャンセル待ちでフィンランド航空に申し込み、その便を記入し、学会本部にビザ申請書類を発行してもらうことにした。その書類で無事にロシア大使館からのビザは取れた

が、肝腎の飛行機が 8 月になっても取れないのである。問い合わせると、団体客が入っているのでキャンセルが出ないのであるとの返事で、やむなくエコノミーからビジネスに変更した。おかげで随分と高い運賃を払うこととなったが、10 時間あまりの成田 ヘルシンキ間を快適な座席で旅してきた。帰途は疲れもあったのか、緊張から解放されたことも加わり、夕食を取って、ほとんど眠っているうちに、成田に着いた。

本学会は高次脳機能を主に心理・生理学的に研究する人々の集まりである。参加は初めてであったが、講演や自分の発表やフェアウェルパーティでの会話から得た限りでは、参加者は医師 (おもに精神科医、神経内科医、脳外科医)、神経科学者、臨床心理士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士など多彩であった。会場はサンクトペテルブルグ市街から約 15km も離れたバルト海に面するプリバルチスカヤホテルで、

約1週間滞在した。参加者は圧倒的にロシア人が多く、次ぎにヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアの人々で、アジア人は少なく、日本人は20人にも満たなかった。

発表の内容は主に脳波、脳磁図、PET、fMRI(核磁気共鳴の現象を使って、脳の活動部位をイメージする手法)、事象関連電位(平均加算することにより背景脳波の中に埋もれている微弱な脳の活動電位を検出する手法)などを用いた高次脳機能の研究発表であった。情動、意欲、注意、恐怖などに関する発表も比較的多く、大脳辺縁系の海馬、扁桃体、帯状回や前頭葉眼窩面などの機能と所在が話題となり、私にとっては印象的で、かつ興味深いものであった。まだ基

礎的な研究成果の発表であり、最近の注意障害、行動異常などの高次脳機能障害(行政的意味における)に対して、すぐに治療に結びつくものではないが、これらの基礎的成果の集積が不可欠であろう。日本の臨床神経生理学会の発表内容とは少し趣を異にするものであった。

着いた頃はまだ紅葉が始まったばかりのようであったが、滞在する1週間ほどの間に、午後吹く風は冷たく、寒くなり、季節は冬に向かって駆け足であった。一人での、もともと poor な英語での国際学会、いくつかハプニングもあったが、それらの笑い話はまた別の機会に。

認知症予防 読めば納得！ 脳を守るライフスタイルの秘訣

山口晴保著(協同医書, 2008)

認知症予防のためのライフスタイルが著者の30年にわたる研究や最新の文献からまとめられている。認知症予防や健康のための情報が氾濫しているが、我々医療従事者は対象者に対してエビデンスに基づいた情報提供が求められる。その際にこの本は役立つと考え読み始めた。しかし読み終わった時には、自分自身が生活習慣を見直し、「明日から階段を使い、魚を多く食べよう！」と行動変容させられていた。多くの図や実際の脳の病変が減少した写真が用いられており説得力がある内容となっている。そして端々にちりばめられた上州弁や冗談が決して容易ではない内容を楽しく読ませてくれる、先生の人柄が詰まった本である。

編集スタッフ 山上徹也

ぐんま認知症アカデミー 第3回秋の研究発表会

日時:平成20年11月30日(日)

13時30分~18時

(受付13時~)

場所:群馬会館 ホール

駐車場:県庁駐車場をご利用下さい。

(手続きをされると無料となります。)

参加費:1,000円

参加申込み:事前申し込みが必要です。

(定員に達するまで。)

定員:先着300名程度。

対象:保健・医療・介護職、ご家族など

内容:研究発表8演題と特別講演

詳細とお申込は、ホームページへ

<http://happytown.orahoo.com/ninchi/>

県支援センター事務局便り (H20.3~H20.10)

- | | | | |
|------|--|-------|----------------------------|
| 4.15 | ニュースレター10号発送 | 7.6 | 全国地域リハビリテーション支援事業 連絡協議会 |
| 6.13 | 支援センター受託団体である群馬リハ ネットの第1回理事会にて、20年度 事業計画を報告(主要事業:第7回群 馬地域リハ研究会 等) | 7.10 | 県介護高齢課より2/4期事業予算を 受入 |
| 6.11 | 県介護高齢課より1/4期事業予算を受 入 | 10.29 | 第7回群馬地域リハ研究会第1回部会 |
| | | 10.31 | ニュースレター11号発行 |



平成20年度第1回群馬リハネット理事会開催

平成20年6月13日(金)19時から群馬大学医学部保健学科 大会議室において、群馬リハネット理事会が開催された。

県からは、新木恵一健康福祉部介護高齢課長と、武井寿氏が出席された。

まず、平成19年度県支援センター事業報告書・決算報告が酒井県支援センター長よりあった。

1)平成20年2月14日に県庁で開催した広域支援センター連絡協議会、2)平成19年10月21日に県庁で開催された、元気県ぐんま21推進大会「ボケない頭・元気なカラダ」、介護予防サポーター初級養成研修会、3)平成20年1月26日に群馬県公社総合ビルでの、惣万佳代子講師、長谷川幸子講師、長谷川幹講師による地域リハ関係者研究会、4)平成19年9月30日、平成20年3月31日発行ニュースレター、などについて報告した。

次に浅川事務局長より、群馬リハネット平成19年度事業報告・決算報告があり、これについて内田監査担当理事より、事業の執行及び決算ともに適正であったと報告され承認された。

また、山口副理事長から介護予防サポーター調査報告書と育成マニュアルについて、田中調査部会長から訪問系リハビリテーション資源調査報告、講師バンク調査報告について説明があった。

平成20年度県支援センター事業案・予算案について、酒井県支援センター長より研修会についての説明があった。

そして群馬リハネット平成20年度事業案・予算案に関しては、浅川事務局長より説明があり承認され、山口副理事長よりビデオ収支状況について説明があった。

意見交換では、1)新谷理事より、ケアマネージャー、訪問看護師、PT、OT、の意識の違いを埋め、訪問リハが広がるような改革をお願いしたい。2)須藤理事よりケアマネージャーが訪問リハをしないのは、認識不足ではないかと思われるので、県のケアマネージャー研修で、必要性を高めていただきたい。3)山田(高玉理事代表)よりケアマネージャー研修をもっと定期的に行って欲しい。等の意見があり、新木介護高齢課長より研修での取組や、医療法改正の要望を重く受け止めたいとの説明があった。

丹下理事より、介護予防サポーター大会日程についての質問があり、酒井県支援センター長より、日程は検討中であるが11月の平日あたりを予定しているとの説明があり、山口副理事長より昨年度までは、県の介護予防イベントと同日で行ってきたが、今年度からイベントが中止になったため、県と検討したいとの補足説明があった。

群馬リハネット事務局便り (H20.3~H20.10)

平成20年10月現在会員等の状況

* 加入団体 33 団体

* 賛助会員 団体会員 2 団体

(株)孫の手・ぐんま(旧ハッピーラブハッピー)と、榛名荘病院より賛助会費をいただいております。

* 個人会員 1名

5.11 ぐんま認知症アカデミー第3回春の研修会
(後援)

6.13 平成20年第1回理事会

10.31 ニュースレター10号発行

編集デスク

山口晴保 清水尚子

山上徹也 角田祐子

発行

群馬県地域リハビリテーション支援センター
連絡先

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局
群馬大学医学部保健学科理学療法学専攻内

Tel/Fax : 027-220-8966

E-mail: tsunoday@health.gunma-u.ac.jp